

まえがき

「平和する」ために、人々が行なう数多くのものを、(…) われわれはほとんど知らない。われわれの目は、あまりに暴力研究によってくらまされてきたのである。(ガルトゥング2003: 81、訳文を部分的に修正)

「平和する」？ ちょっとなじみの薄い言い方だけれども、これを通して平和の新しい面が見えてくる。この本ではこれから、世界の様々な現場で「平和する」人々の姿とともに、平和を捉える新しい枠組みをみなさんにお伝えしていこう。

冒頭の言葉を書いたガルトゥングは、平和研究を長年牽引してきた第一人者である。その人の言葉だけに重みがある。たしかに、私たちは「平和」と言いながら、実際には、戦争や暴力の方にばかり向いてきたのではないか。戦争の悲惨さを強調することで、「どうなってはいけないか」は伝わるだろう。しかし「どうなればよいか」、「どうすればよいか」が具体的にわからない。この肝心な積極的な平和が、これまでみすごされてきたのではないか。こうガルトゥングは指摘しているのではないか。本書はまさにその積極的な平和に光を当てようとする試みである。

人々はどう平和しているのか？ 紛争のもとがあっても、平和な関係をつくるにはどうするのか？ 積極的な平和の条件は何か？ どんな発見があるだろうか？ 戦争の後でいかに関係を修復するか？ 平和を人に伝えるにはどうすればいいのだろうか？ そして、平和の現場を研究する方法はどういうものだろうか？ 本書ではこのような問いを扱っていく。

ここでは平和というテーマに、人類学の分野からアプローチしようとする。本書の著者たちは、その中でも主に「文化人類学」という分野の流れに立っている。けれども文化と自然を分けずに、総合的に研究を進めたいという思いから、『平和の人類学』というタイトルを選んだ。人類学という分野だけに閉じこもらずに、国際関係論、歴史学、社会学の研究者にも加わってもらい、学際

的・対話的に平和の現場にアプローチすることを目指した。

本書は人類学的な平和研究の分野において、日本でははじめての論集である。平和の研究のために、人類学的アプローチの利点と独自性はどこにあるのだろうか？ これまで平和の研究は、(国際)政治学や国際関係論によって率いられてきた。政治学の基本的な研究の単位は国家である。国家の行為として戦争を定義し、平和も戦争を終結させる国家間の行為として捉えられてきた。けれども、平和は国家よりもずっと広い現象である。ごく少数の政治家よりも、民衆、市民、草の根の人々が形づくる世界の方がより大きく、より広い。そうした人々こそ地球社会の中身であり、主役だともいえる。国家の枠組みに収まらない人間の現実を、現場に密着しながら研究してきたのがまさに人類学である。だから人々が「平和する」姿を捉えるために、人類学者はとても有利な位置にいる。本書ではその力を発揮しようとした。

この本は3種類の読者に向けられる。まず平和というテーマに関心のある人類学の学生と研究者。それから新しいアプローチを求めている平和学専攻の学生と研究者。そして平和を捉え、語る言葉を探している、例えば博物館展示、平和教育、市民活動などの現場の実践者。このために特定の専門分野の中でしか通用しない記述は避けて、他分野や、初心者、学生にもできるだけわかりやすい説明を心がけた。

教科書としての工夫もこらした。その際、特に読者として想定したのは、文化人類学ならびに平和学の授業を履修する大学の学部生である。学習の助けとなるように、各章には「本章の目標」、「課題」、「推薦図書」を掲げた。

本書の構成と内容を紹介したい。第1章は「平和の人類学」の理論枠組みを述べたもので、本書の導入に当たる。これ以降は、8つの論文が、3部に分かれて登場する。第I部「平和をつくる」には、平和構築・和解をテーマとする論文を収録した。第2章は南部スーダンの草の根平和構築を、第3章は東ティモールのローカルな和解の概念(「ナヘビティ」)を、第4章はナチズム後のドイツで始まった民間の和解実践を扱ったものである。第II部「平和を伝える」は、平和や戦争・紛争の記憶を、次世代や外部にどう伝達・継承するのかとい

う問いに関わる。第5章はグアテマラ内戦で被害を受けた村でのコミュニティ・ミュージアムの建設と記憶の回復について、第6章は近年の日本における「平和博物館」運動の展開について論述したものである。第Ⅲ部「平和を問い直す」の3論文は、従来の平和観を批判的に乗り越えて、新たな方法論的・理論的視座を提示する試みである。第7章は、日本や東南アジアの現場を幅広く歩き、独自の平和学を積み重ねてきた研究者にインタビューをして、その方法論を「平和の現場の歩き方」としてまとめたものである。第8章は、国際政治学を学んだ著者が人類学的アプローチと対話しつつ、国境を越えて平和を研究するに適したアプローチは何かについて、北朝鮮問題と日本・韓国のNGOとの関わりを例に考察した論文である。第9章は東日本大震災・福島第一原発事故というアクチュアルな状況にさらされた人々が「避難する」実践を読み解いて、新たな平和観を提起するエスノグラフィーである。

一冊の本も生きて、働く。本書が、研究、授業、平和学習、展示の企画、市民活動のようなさまざまな現場で活用されること。読者にとって思いもかけなかったところに「平和」を発見する視座となること。平和に関する問いを喚起すること。本書自体が、対話の場^{フォーラム}となって、新しい人と人のつながりを生み出す媒介となること。この本が、そんな力を発揮することになれば幸いである。

これから平和を発見する旅に乗り出そう。

■参考文献

ガルトゥング、ヨハン

2003「平和学における認識論と方法論」中野克彦訳、ガルトゥング、ヨハン・藤田明史編著『ガルトゥング平和学入門』pp.69-84、法律文化社。

小田 博志

関 雄二